

尾州有楽流 教本

【基礎編】

Ⅲ 茶室の構成、および茶室内での人の役割と位置

①茶室の構成

一般的に「茶道ができる和室」のことを「茶室」と呼んでいますが、この茶室は、「小間」と「広間」に大別されます。

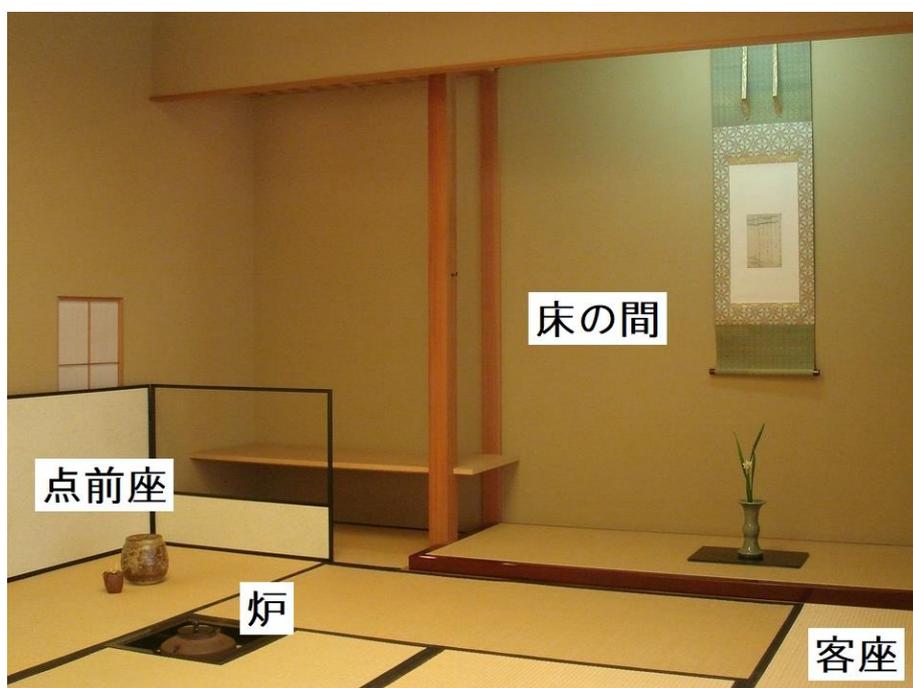
四畳半よりも狭い茶室を「小間」、四畳半よりも広い茶室を「広間」といいます。

また、中級編以降で説明しますが、小間茶室には例えば「躡口（にじりぐち）」だとか「台目構（だいまがまえ）」だとかいう小間茶室特有の設備が附属しているので、四畳半茶室でこうした小間の設備が設けられていたら小間扱いになりますし、設けられていなければ広間扱いになります。

小間茶室なのにこうした小間の設備が無い、或いは広間なのに小間の設備がある、という例外は全く無いわけではありませんが、それはあくまでごく少数の例外なので、ここでは無視します。

茶道の稽古場はたいてい広間の茶室なので、以下、広間茶室の構成を述べます。

※なお、茶室のことを「茶席」とも、単に「席」とも言います。茶室というと茶道の和室建築そのものを指しますが、茶席というと茶を点てる空間を指すイメージです。



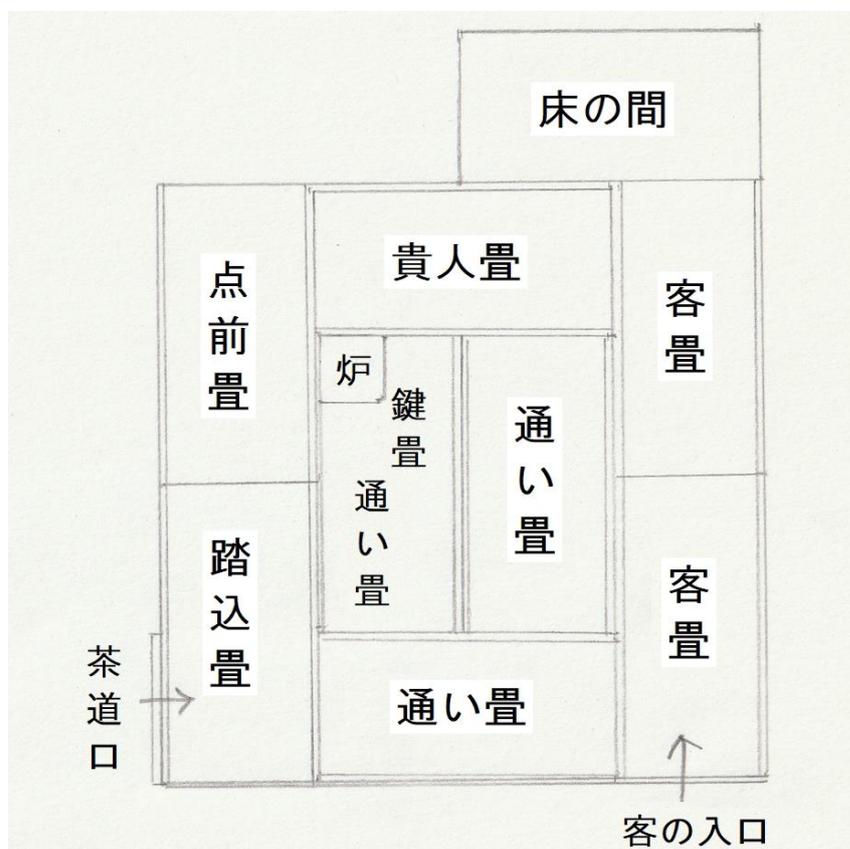
上掲の写真の通り、茶室には必ず「床の間」があり、掛物を掛け、花入に季節の花を入れて飾ります。

「茶室」が茶の湯をおこなう宗教的に神聖な空間となるのは、この床の間の掛物や花が仏世界を象徴する「本尊」となるからなので、茶室に床の間は不可欠です。

それから、床の間とは別の一边に「点前座（てまえざ）」があって、ここでお茶を点（た）てます。点前座の脇に、11月から4月は釜を据えて湯を沸かすための「炉」が切られています。5月から10月は炉は塞がれて、点前座に「風炉（ふうろ）」が据えられて、風炉に炭火を入れて湯を沸かします。

たいてい、この点前座の反対側に、お客が座る「客座」があります。

こうした「点前座」「客座」というのは、室内の畳によってどこの畳がどのような用途の畳なのか（点前座になる点前畳なのか、客座になる客畳なのか、etc.）が、下図の通りだいたい決まっています。



***点前畳**：お点前をする畳。点前畳の上半分には絶対に足を踏み入れてはいけません。

***踏込（ふみこみ）畳**：茶道口と点前畳の間にある畳。点前の出入りの邪魔になるので、ここにお客が座ることはありません。

***貴人（きんにん）畳**：VIP 席なので空けておくのが本来だけども、人数が多かったりすると客座としてお客が座ることが多々ある。

***客畳**：お客が座る畳。通常、床の間に近いほうが上座（かみざ）になる。

***鍵（かぎ）畳**：炉が切られているところの畳。お道具を置くことがあるので、ここも通行禁止。

***通い畳**：歩いて通行可能な畳。逆に言えば、この通い畳と踏込み畳以外は通行禁止。なお、お客の人数が多いと、下辺の通い畳も客畳として使用される。

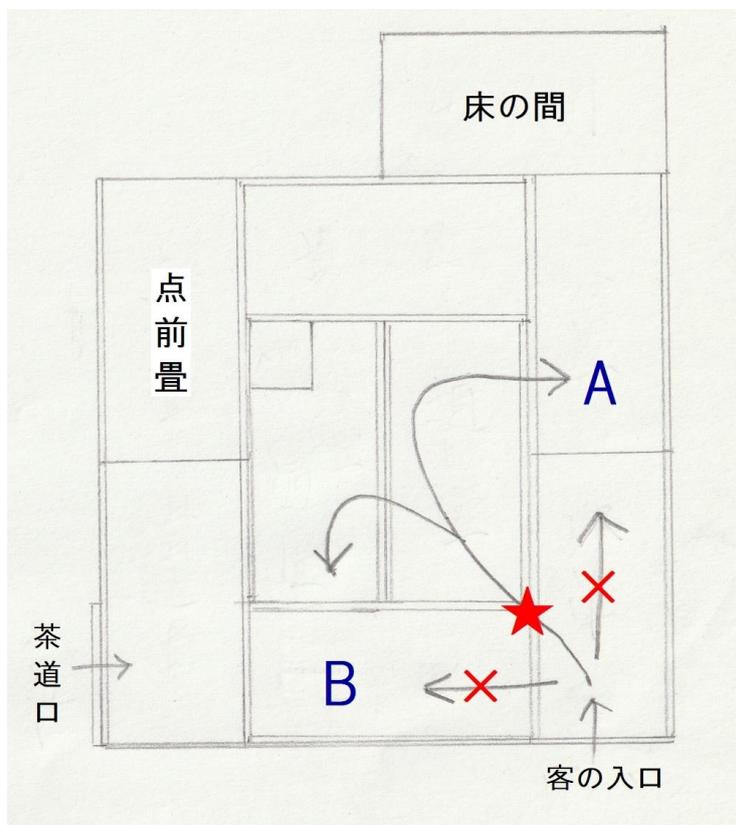
***茶道口**：点前をする人など主催者側が席中に入るための正式な入口。なお、茶道口の他にも主催者側が席中に入るサブの入口として給仕口が設けられることも多々ある。

※茶室に隣接して茶室内でもてなしの下準備（お茶碗を洗う、お菓子を器に盛り付ける、など）をおこなう「**水屋**」という部屋があり、茶道口や給仕口はたいていこの水屋に接続している。

基本的に水屋に接続する一辺に点前畳や踏込み畳があり、床前が貴人畳で、それ以外の周辺部の畳が客畳、これら茶室内周の畳以外の中央部の畳が通い畳となります。

図は八畳間の一例ですが、六畳間なら中央の通い畳が一畳だけになり、逆に十畳・十二畳と広がると、点前座や貴人畳が増加することはない、客畳や通い畳が増えていくことになります。

いずれにせよ、茶室内は基本的に「通い畳と踏込み畳以外は通行禁止」ですので、お客として「客の入口」から茶室に入ったら、「通い畳を歩いて席に着く」ことになります。具体的には、下図をご覧ください。

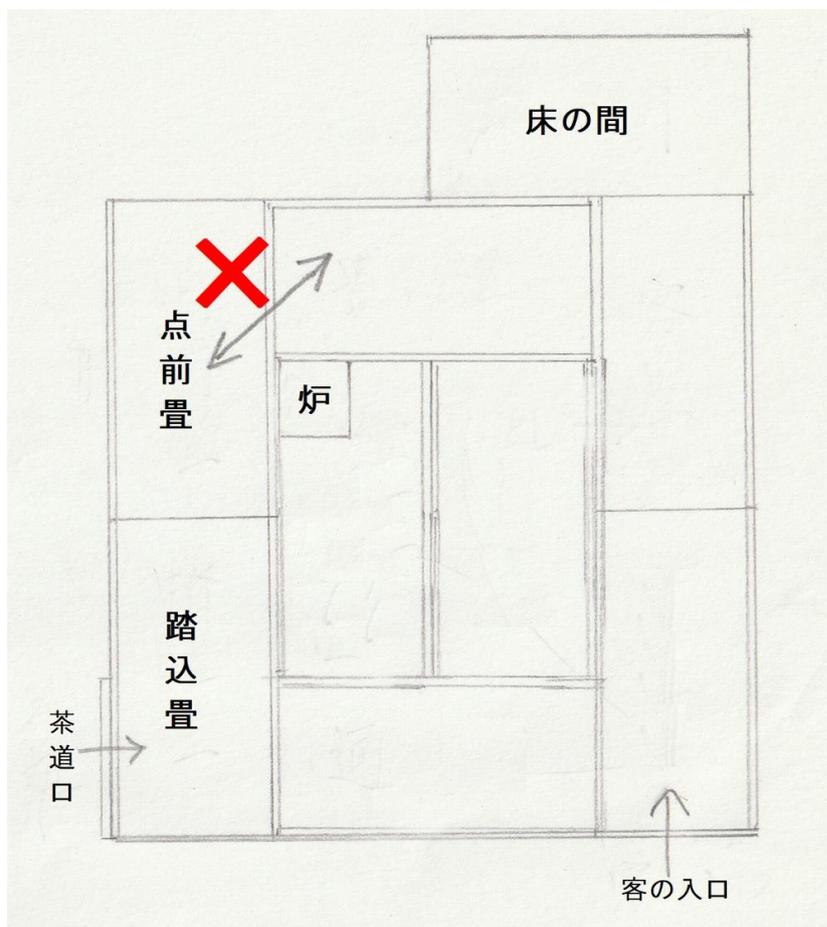


自席が A や B だとすると、客の入口から入ってそのまま客畳を直進して A や B に行くのはダメ (×) で、必ず赤の星印 (★) のところを通して通い畳に出て、そこから A や B の前まで行って、A や B に真正面から入ります。

真正面から入ったら席中央のほうに 180 度回って向きますが、床の間の方が上座ですから、自分よりも床の間側の隣の人にお尻向けないように回ってから座ります。この図のような座敷であれば、A も B も逆時計回りで回って席中央を向いて座ります。

なお、何度も言いますが、茶室のなかで歩いて良いのは「通い畳と踏込み畳だけ」です。特に点前畳の上部は歩くどころか足をのせることすら絶対禁止の清浄エリアなのですが、うっかりすると貴人畳⇄点前畳とダイレクトに移動しようとする猛者がいます。この、「**貴人畳⇄点前畳のダイレクト移動**」は、茶席で絶対にやってはいけない、やったら張り倒されて即・破門になっても文句は言えないくらいの**絶対禁止事項**なので、よくよく覚えておいてください。風炉の時期は炉が塞がれているので、やや分かりづらいですが、やはり通ってはいけません。また、炉が塞がれているその上も、通ってはいけません。

《 ↓絶対に通ってはいけないところの図 《



②茶席での人の役割と位置

お茶席にいる人は、お客側と主催者側とに大きく分かります。

まずは主催者側から挙げると、とにかく一番メインのホストのことを「亭主」と呼びます。少人数のみを招いた茶事では、主催者側が亭主一人ということもあります。その場合は、亭主がお点前から給仕から何から何まで全部やります。

実際のお茶会では亭主一人がすべておこなうということではなく、亭主のフォロー役である「半東（はんとう）」という役の人がいます。亭主のことを「東（とう）」と言っていたこともあり、「東」のフォロー役なので「半東」です。少人数の茶事・茶会の場合は、亭主がお点前をしてお茶を点て、半東がお茶碗をお客に取り次ぎするなどフォローに回ります。

大勢のお客をもてなす、いわゆる「大寄せ茶会」では随分役回りが違ってきて、亭主というよりもその席の主催者本人である「席主（せきしゅ）」がいます。席主がお点前をすることはあまりなくて、席主がいるようなお茶会でお点前をする人は単に「お点前」とか「お点前さん」とか呼ばれます。そして大勢のお客にお菓子やお茶を運ぶ「運び」とか「お運び」「お運びさん」とか呼ばれる人が複数人います。席主が半東を兼ねることもあります。席主はお客といろいろ話をせねばならず忙しいので、席主に代わってお点前さんの点てたお茶をお客に取り次いだりお運びさんにあれこれ指示を出したりする半東がいる場合もあります。あと、メインのお客（正客）以外のお客用の点て出しのお茶を点てたりする水屋のスタッフも複数人います。

※お茶会ならば茶席以外に、受付や案内などのスタッフがいるほか、寄付（よりつき）と呼ばれる待合室に茶席内で使われている茶道具の箱などが飾られている場合はそれを説明したり見張ったりする「道具番」と呼ばれる人がいることもあります。



次にお客側としては、一番メインとなるお客のことを「**正客**（しょうきやく）」といいます。正客の次のお客は「**次客**（じきやく）」、その次は「**三客**（さんきやく）」、以下、「**四客**」「**五客**」と続きますが、実際に呼称されるのは三客か四客くらいまででしょうか。で、正客の人を呼ぶのに「おい、正客！」と言う人はおらず、たいてい「お正客」だとか「ご正客さま」とか呼びます。以降も、「お次客さま」「お三客さま」とか呼びます。

最後尾のお客のことは、「**末客**（まつきやく）」とか「**お詰**（つめ）」とか言います。最後尾なので、形式上はその席のお客のなかで一番身分が低いこととなりますが、拝見に回った道具を適宜に処理して返却するなどいろいろ役務があるので、実際には正客に次ぐナンバー2のような人がお詰を務めます。

なお、正客以外の次客～末客までをひとまとめにして「**連客**」といいます。

たいてい、正客が客畳の一番床の間に近い上座に座り、以降順次、次客・三客…と座ります。お客の人数が多ければ、折り返してL時状に座りますし、更に人数が多いときはコの字状に座ることもあります。

客座に座るときは、一畳に三人ほどを目安に、尾州有楽流では畳の縁から膝まで一尺（30センチ）ほどあけて座ります。畳の縁から膝までどのくらい空けるかは流派によって違うので、ここは自分の流派に合わせるのではなく、連客の膝がデコボコにならないように正客があけている幅にあわせて座りましょう。

